コ　ラ　ム

新型コロナウイルス感染症下での子どもたちへの接し方

弘前大学教育学部　教授　田名場　忍

昨年春以降一年半あまり，私たちは新型コロナウイルス感染症拡大の恐怖に繰り返し直面し，身体的あるいは経済的，さらには精神的に苦しい状況の中，さまざまな行動制限下での対応を続けてきました。現在，感染拡大はだいぶ収束しておりますが，新たな発症者がなくなったわけではありませんし，ウイルス変異などの心配も出てきています。先が見通せない状況の中，本県の子どもたちも，マスク着用などこれまでとは異なる行動制限のもとで家庭や学校，地域で生活しています。青少年期は，自分自身を見つめ直し，これからの自分を探していくという重要な時期にあたります。このような時期を，今，子どもたちは新型コロナウイルス感染症下の厳しい状況の中で過ごしており，周囲の大人たちの一層の理解と支援が期待されます。今回は，こうした状況下での子どもたちへの接し方に関し，理解と支援という観点から，それぞれ『帰属バイアス（基本的帰属の錯誤）』と『非言語的コミュニケーション』について取り上げてみます。

まず，新型コロナウイルス感染症下で自分探しをしている子どもたちを理解しようとするとき，心配のあまり子どもたちの否定的な側面を拡大してとらえがちになっていませんでしょうか。例えば，目を伏せて黙っている子どもを見たとき「自分に閉じこもりがちな暗い性格なのでは…」と考えてしまうということなどです。しかし，他者と会話をしたがらない原因は，子どもたちの内面だけに限らないのです。偶然嫌な状況に出会って，その時だけ暗い気分になっている可能性もあるのです。一般に人は，他者の行動が特徴的であると思うとき，その原因について他者の置かれている状況からの影響を過小評価し，内面的特徴によるものとしてとらえる傾向があります。こうした人の偏った原因のとらえ方は帰属バイアスと呼ばれており，その中の一つが今回紹介しました基本的帰属の錯誤になります。厳しさが増す状況下で過ごす子どもたちを誤って理解しないよう，厳しい状況を子どもとともに受け止め，できることなら過去の辛さだけにとらわれず（あるいは，その辛さに耐えてきた子どもたちを評価し），将来の可能性につながる子どもたちの力を一緒に探していきたいものです。

次に，これまで様々な機会に書かせていただいた非言語的コミュニケーションについて再度取り上げ，まとめておきたいと思います。人のコミュニケーションは，言語と非言語のコミュニケーションに分けることができます。話す内容や書かれた文章などの言語的コミュニケーションに対して，非言語的コミュニケーションは，表情や話し方（話し方のトーンやピッチ，抑揚，うなずきなど），外見，距離や息づかいや体温，さらには場所や経緯など，多くの種類があります。また，非言語的コミュニケーションの方が，対面でのコミュニケーションでの印象等により強い影響をもつことが知られています。さらに，非言語的コミュニケーションは，発信者が意識やコントロールをしにくいことも特徴で，本当に思っていることが非言語的コミュニケーションに出てしまいやすいのです。新型コロナウイルス感染症下の状況の中，子どもたちに隠そうとした大人たちの心配や不安は，表情や話し方などにあらわれ，伝わってしまうことも懸念されます。このようなとき，子どもたちは大人たちの言動を見て「嘘をついている」「何か隠している」などと疑心暗鬼になったり不安になったりします。これでは，せっかくの大人たちの気遣いや支援も仇になってしまいます。可能であれば，大人たちの心配や不安から出発し，大人たちが心配や不安にどのように向き合い，対処していくのか（心配や不安から距離をとることも含め）を話題にしていただければと思います。勇気と希望をもった大人たちの背中を子どもたちに見せてあげられることが大事な支援になるはずです。

子ども・若者が使う『道具』としてのインターネットと遵法

青森県インターネットプロバイダ防犯連絡協議会　副会長　柳町　真洋

まとめると、

１．いまの子どもはデジタルネイティブ。ネットを『道具』としてあたり前のように使う。

２．フィルタリング等の護るサービスはあるが、基本は使い方。保護者と子どもで話し合いを。

３．ネットは現実社会の延長。悪い行為をすれば国内法の適用を受ける。気をつけよう。

●１．子ども・若者が使う『道具』としてのインターネット

いまの子ども・若者は、生まれたときからインターネットが身近にある世代です。

ワンオペ育児の時や乗り物移動の時などのヘルプツールとして、さらに最近ではコロナ禍でおうち時間が増えた事もあり、1〜2 歳の頃からスマホ・タブレットを使い動画サイトで幼児向けコンテンツを見まくっているという事も珍しくないようです。

保護者が望む『騒がずに視聴する』というスキルを始め、広告をスキップしたり、好きなシーンをもう一度見たり、関連動画に進んだりと、次々と操作に慣れていきますのでスマホ・タブレット特化型のＩＴ習熟度を高める英才教育と言えなくもありません。勿論『道具』ですから、向き不向きもあるかも知れません。

基本的な部分ですが、インターネットや関連ツールは単なる『道具』である為、そのものには善悪はありません。ただそこにある『道具』として、使われていきます。

そして、最近では生きていくうえでほぼ必須ともいえる『道具』になっています。

『道具』ですから、子ども・若者には早く使って慣れて習熟度をあげて欲しい反面、常習性が高い為、保護者としては、耐性を付けつつゆっくりと染まって欲しいという希望を持ちたくなると思います。

《　トピック『世代で技術の使い方の前提が異なる』　》

電話・音声通話といえば、必要な時に相手と接続してから通話するという手順になるかと思いますが、いまの子ども・若者の利用方法の中には、すでに前提が異なっているものがある模様です。

アプリの無料グループ通話機能で、１対１または複数で接続したままにしておき、必要な時に話しかけて用事が終わったらまた無言に戻るという使い方だそうです。

それぞれの自宅で課題を進める際などに利用され、いっしょに作業しているような感覚になる為にモチベーションが維持でき、分からないところがあったら声を出せばそのまま聞けるという使い方になるようです。

インターネットは、それぞれ別の組織が管理する小さいネットワークが相互接続している集合体です。
一般に提供されるサービスの管理は、民間が行っていますのでサービス内容やインターネットのセキュリティなどに差異があります。

そもそもインターネットは、初期の頃から、システムが継続して稼働する状態の可用性や機能追加に柔軟な汎用性を重視していたようですので、あまりセキュリティを考慮して設計されていませんでした。

現在稼働している各種のセキュリティは、ほとんどが後付けで実装されています。

現実社会において、わが県は首都圏から物理的な距離が遠く、子ども・若者がすぐには行けない・会えないという『障壁』がありましたが、インターネットのサービスは物理的・制約的な『障壁』を簡単に乗り越えてしまいます。現実社会では知り合えない人たちと、世代を超え立場を超えて交流ができますし、それは映像付きのリアルタイム映像配信であったり、コメント入力による双方向であったりします。

それを便利と考えるか危険と考えるかはそれぞれの立場で異なると思いますが、世の中はすでに、就職時の就活サイトへのエントリー、理想の交際相手を見つける為の婚活サイトへの登録、最近では人生の終わりに終活情報の収集など、インターネットを活用して自分から動かないと、参加する手段や情報を得る手段が減ってしまう仕様に変化しているようです。

なお、災害時の『デマ』が人々の善意によって拡散してしまうように、与えられた情報をそのまま鵜呑みにして信じてしまうのではなく、ある程度の真偽について判断する為に追加情報を得るスキルと分析するリテラシーが求められます。

情報を得るだけでなく、自分から発信する事を必要とされる場面もあるかも知れません。その場合には、また別のスキルやリテラシーが求められます。

●２．子ども・若者を護るインターネット機能

子ども・若者を守る『障壁』として、ネットワーク管理組織の提供するフィルタリングサービス（有害情報制限サービス)、国内モバイルキャリア統一名称『あんしんフィルター』が存在しますが、フィルタリングサービスは申し込んで完了ではなく、契約者である保護者が、子どもの成長に合わせて子どもと話し合いながらご家庭ごとに設定調整していくものです。

つまり、保護者のＩＴ習熟度が低かった場合には、子どもが成長してＩＴ習熟度があがったら、保護者もあわせてＩＴ習熟度をあげてもらうことを前提で作られています。

「保護者が使っているアプリが動作しないと、家族間の連絡が取れない。」
「義務化されたので契約時にあんしんフィルターを設定してもらったが、必要なサイトも見れないので困っている。」
「保護者端末側の管理者パスワードが分からなくなった。」
というように、保護者が苦労されている一方で、
「子どもが勝手にあんしんフィルターを外してしまう。」
「利用できないように設定したはずの時間帯でも使っている。」
など、子どものＩＴ習熟度があがるにつれて、徐々に問題が発生してきます。

フィルタリングは、指定されたブラウザ以外では動作しない場合や、各サービスの専用アプリの導入に関しては個別のセキュリティ設定が必要な事などもありますので、設定だけで対応するのでは限界があるようです。

スマホなどの端末は、子ども・若者に『買い』与えたものではなく保護者から『貸し』与えたものという共通認識をもって、事前に使い方の約束事を話し合って決めておくなど、ご家庭ごとに利用バランスを調整する必要があると思います。

●３．子ども・若者が行うべきインターネット所作

現実社会で発生する事象は、インターネットでも発生します。

例えば、子ども・若者に保護者のクレジットカードを勝手に使用されたという事案にしましても、現実社会・インターネットに関係なく発生します。現実社会では『勝手に高額商品の購入や、高額接客サービスに使われた等の事案』となり、インターネットでは『勝手にゲームアプリでの高額課金や、配信アプリの高額投げ銭に使われた等の事案』となります。インターネットの方が、現実社会でモノが残らないという点で無駄に使われたというインパクトが大きく感じられるかも知れませんが、基本的に差はありません。

この事案では、そもそも、子ども・若者が保護者の決済方法を利用できている部分がおかしいように思えます。

《　トピック『著作権違反の個人情報開示請求』　》

ＩＴ習熟度があがった子ども・若者が、安易に手を出しがちなファイル交換ソフトによる違法な『漫画コンテンツやテレビ番組・映画などの動画コンテンツ』の入手ですが、国の公開サービスである裁判所の「裁判例検索」によりますと、2021 年 1 月頃から、あるピアツーピア型のファイル交換ソフトを利用した、漫画等の著作権違反の事案での『個人情報開示請求の判例』が、全国のネットワーク事業者に対して積みあがっており、要求されたほぼすべての開示請求にて個人情報開示を認める判決主文が出されていた模様です。

裁判記録として公開されているのは個人情報開示までであり、その後、漫画原作者や出版社からの民事訴訟等で、実際にいくらの金額の損害賠償請求が行われているのかは見つける事ができませんでした。当事者同士が公開しない限りは基本的に情報が出ませんので、目新しくない限りはニュース記事にも載りません。

実際に損害賠償請求が行われているとした場合、軽い気持ちで行った事が取り返しのつかない結果を招いてしまったという事になるのでしょう。

繰り返しになりますが、インターネットは特別な空間ではなく、国内法の適用を受ける現実社会の延長にすぎません。

「現実社会じゃないから」「インターネットだから」という線引きには意味がなく、違法行為であれば捜査当局は同じように取り締まりを行いますし、他者の権利を侵害する行為があれば損害賠償請求等の民事訴訟を起こされるかも知れません。

実際に被害が出ている場合、子ども・若者だからという理由で特別扱いされない事も多いようですので、インターネットでも現実社会と同じように節度を持って利用していく事が重要です。

年齢に関係なく、ネットリテラシーを高め、国内法令をまもってインターネットを利用していきましょう。

（注：このコラムは、2021 年 11 月時点の情報で書かれています。）

こころの健康教育・人間関係づくり教育をすすめよう！
ー子ども・若者の自殺予防教育のためにー

青森大学社会学部　教授　船木　昭夫

文部科学省は、自殺・いじめ・不登校などの状況を毎年調査しており、10 月 13 日に 2020 年度の結果を公表しました。自殺した児童生徒は 415 人（小学生 7 人、中学生 103 人、高校生 305 人）で 2019 年度から 100 人近く増え過去最多になっています。この 10 年では 2.7 倍に増加しています。

警察庁の調査では、昨年度の暫定で 500 人を超えており、学校や教育委員会が把握していない事例がさらにあるとみられています。

10 代から 30 代では自殺が死因の第 1 位を占める事態が続いており、主要 7 か国 (G7) の中で日本だけです。自殺対策白書では「若い世代の自殺は深刻な状況」と警鐘を鳴らしています。

自殺した状況の回答では、「不明」が 218 人でもっとも多く全体の半数を超えていますが、その次に 10 代で学業不振や進路の悩みなどが多く、20 代、30 代は健康問題の割合が多くなっています。ただし、自殺はこれまでの研究で原因は一つではなく、さまざまな要因が複雑に絡み合っていることがわかっています。

自殺予防は、すべての人を対象とした予防活動（Prevention：プリベンション）、現在危機的な状況にある人を対象にした危機対応（Intervention：インターベンション）、不幸にも自殺が起きてしまった後に次なる自殺を起こさないための事後対応（Postvention：ポストベンション）といった三段階です。いずれも自殺予防に重要です。

その中で、プリベンションとしてすべての人を対象とした自殺予防教育を行うことは、自らの自殺予防だけではなく、身近な人の危機に気づき、関わり行動を行い、援助者としての役割を果たすことになります。自殺予防に限らず様々な問題の早期発見・解決を目指す取り組みになります。

自殺予防教育を進めて行く上で重要なことは、その土台になる「健康管理」「相談体制」などの安全・安心な環境づくりとともに、下地づくり教育の「こころの健康教育」「人間関係づくり教育」を進めて行くことです。筆者が具体的に実施している項目を紹介します。

「自分を知る・よりよい人間関係行動」

①エゴグラム（自分に気づく）
②聞き上手（傾聴スキルを身につける）
③人との違いを受け入れる（受容）
④リフレーミング（見る角度を変えて肯定的にとらえる）
⑤怒りのコントロール（よりよい感情表現）
⑥アサーション・トレーニング（さわやかな自己表現）
⑦よりよい対人関係スキルを身につける（ＳＳＴ）
⑧ストレスへの対処（コーピングスキル）

これらを効果的に行うために、グループワーク、ロールプレイを取り入れて実施することが重要です。体験した中学生・高校生・大学生からは、「自分を理解するヒントになった」「感情について考えることができた」「よいコミュニケーションを身につけることができた」等、好意的な評価を得ることができました。

次に重要なことは、「相談する」「助けを求める」「心の変化に気づく」ことであり、それらのスキルを身につけていくことが必要です。あるアンケート調査では、友だちに「死にたい」と言われたことがありますか？という質問に対して「ある」という回答は 19.5%（N=853）にも上がりました。「相談する」側も「相談を受ける」側もそのスキルを身につけることが必要です。

このような「自分を知る・よりよい人間関係行動」、「相談する・相談を受ける」のスキルを身につける対象は、ハイリスクな子ども・若者とともに、多くの子ども・若者、保護者、教師・教員、地域住民です。それぞれの立場や役割にあった「こころの健康教育」「人間関係づくり教育」のプログラムを作成し実施することが必要です。

米国の医学雑誌 JAMA において、Kessler らの調査結果では、「希死念慮は 10 歳までは低いが、12 歳までゆ

っくり高まり、12～17 歳に急速に上昇する。12 歳までは自殺計画したり、自殺を企てたりはほとんど見られないが、15 歳まで直線的に増加し、その後、17 歳までは緩やかな増加を示す」と報告されています。日本においても、思春期には学年が上がるとともに、希死念慮が高まることが報告されています。（兵庫・生と死を考える会 2006 年）

コロナ禍の中、子ども・若者のおかれている状況は大人が想像している以上に、ストレスの重さを感じており、早急に「こころの健康教育」「人間関係づくり教育」を進めることが必要です。

地域とつながる子どもの居場所づくり
～津軽の文化に根差した生活体験を通して～

特定非営利活動法人法人元酒蔵の歴史的建造物群を保存・活用する会
理事　　庄司 亜貴子

地域の文化を学ぶ高校生にとって、高校近くにある古い商家で、杉玉の飾られている造り酒屋の建造物は不思議な場所であったらしい。「修復中のこみせがある雪国独特の建物の中がどうなっているのか」と思ってボランティア活動に参加した高校生達は、修復作業を通して、津軽の歴史と生活文化、様々な職人達の生業に対する意識の高さに触れ、生きがいや仕事をすることの意義について深く考える機会となった。

高校生ボランティア達は、祖父母ほど年齢の離れている左官職人から日本の伝統的建築の一つである土蔵の壁の修復作業を体験し、壁の材料として地域の粘り気のある土と砂のような土を 2 種類使い分け、わらを混ぜてこね、外と内壁を 20 層ずつ塗って乾かし、2～3 年かけて厚さ約４０ｃｍの土蔵を塗り、その後、漆喰で仕上げることを教えてもらった。漆喰壁り体験では、漆喰の特徴やきれいに塗るこつを伝授され、実際に漆喰の重さや塗りにくさを体験しつつ、塗った。庭園内の離れ室内の障子貼りでは、紙の貼り方に順番がある理由やこつを実際に貼りながら教えてもらった。

津軽独特の作庭様式の大石武学流庭園の庭木剪定作業では、造園職人から庭の石や樹々の配置やその意味などの説明を受け、実際に枝を縄で縛る際の結び方や除草のこつを教えてもらった。

また、季節の食体験の一つとして干し柿作りを行った。家庭ではりんごの皮むきをしないと語っていた高校生達は、つるつる滑る渋柿の皮むきに苦心しながら時間をかけてじっくり皮むきを行った。冬のおやつや食材として大切に受け継がれてきた渋柿の干し柿作りは古くからあるが、高校生ボランティア達はほとんど作ることも食べることもしなくなった、と話していた。

今年度は、高校生ボランティアに「みんなの勉強室・食堂」（学習支援・子ども食堂）のサポーターとして活躍してもらった。小学生には「津軽弁でおしゃべりできるお姉さん」として自学自習の支援や野菜などの食わず嫌いの子への食育のアドバイザー的な役割をしてもらっている。

高校生ボランティア達は、地域にある元酒蔵の歴史的建造物群の保存と活用など修復活動を通して、自分達の身近な地域社会への視野を拡げ、様々な年代の人々との活動や交流をしながら改めて自己を見つめなおし、自己の内面を探る学びを深めている。また、活動後の感想文では、地域に住む職人さん達から作業や仕事に関する話を聞くことで、年齢に関係なく働き、地域社会を支えているシニアの方々の技術の高さへの尊敬の気持ちを素直に表していた。そして、この修復活動が、高校生ボランティアに、津軽黒石の未知の地域文化に触れることの面白さ、さらには今ある歴史的建造物を大切に守りたいという気持ちへとつながっている。

気付いてあげたい子どものＳＯＳ

青森県発達障害者支援センター「ステップ」
臨床心理士　　成田　成美

子どものＳＯＳとは何か、それは子どもの苦しみであり、困り感であり、不安であり、支えてほしいという願いの現れです。

そういう意味では、子どもに限らず、私たち大人もＳＯＳを出したいと感じることがあります。この文章を書いている今の私がまさにその状態で、「これでいいのかなあ」という不安と緊張、そこから派生する身体的不快感、そして孤独感があります。このような状況に陥るのは、目の前に乗り越えるのがむずかしそうな大きな壁が立ちはだかるからです。

では、子どもにとって大きな壁とは何でしょうか。それは大人からすると簡単に乗り越えられるものであるかもしれませんが、子どもにとってはとてつもなく大きな壁であったりします。

具体的に考えてみましょう。学校にいけない子どもがいたとしましょう。学校に行って、勉強をして、家に帰る、ただそれだけのことなのに、どうしてそんなに苦しむのか…と大人からは見えるかもしれません。でも、子どもからすれば、学校という場所が大きな壁となってたちはだかっているように感じているかもしれないのです。

学校には人が大勢います。たくさんの音と匂いと目線があふれかえっています。どこに身を置いても、おちつける場所が一つもないと感じてしまう子どももいるかもしれません。そういう敏感で繊細な感覚に寄り添うことができなければ、彼らの苦しさには気づくことができません。学校に行かないという行動それ自体がＳＯＳのサインです。何で行けないの…と問いかけても、どう言葉にしたらいいのかわからないという場合もあります。まず、子どもの気持ちを受けとめ、「なぜ？」と問いかけることをやめて、あらゆる理由を想定し、その子の気持ちをイメージし、対策を考えてみてはどうでしょうか。

私が今、勤務している青森県発達障害者支援センター「ステップ」では、子どもの特性に合った環境の提供ということを最も重視しています。発達障害の方は、定型発達いわゆる多数派と違って独特の感性を持っています。同じ世界を見ていても、目の付け所が違う、こだわりの質が違うところがあります。当たり前のことができないと批難される場合もありますが、当たり前のことができる人が当たり前のことをし、違う感性をもつ人は、その良さを発揮して生きていけるようにしていくのが私たちの理想であり、目指すところでもあります。発達障害をもっていると、少数派であるが故の生きにくさがとても強く出てきます。「他の人と違うユニークさが素敵」「いいよ」と肯定し、人と違っても大丈夫と思える社会を築くことが大切だと思います。

ＳＯＳは子どもが「助けて」と声をあげるストレートな形だけではなく、子どもの困った行動の中にもあることを忘れずにいたいと思います。

もう一つ、ＳＯＳというワードでどうしてもあげておきたいのが、いじめの問題です。いじめと自殺は非常に関連性が深く、いじめに気付かず、放置すれば、子どもの命にかかわる問題となることは、みなさんも当然おわかりになっていることと思います。

人の心の育ちには、他者との関わりが非常に重要であると言われています。発達心理学で有名なエリクソンはアイデンティティの確立には幼少期からの様々な対人関係（社会とのつながり）が重要であると述べています。特に思春期から青年期にかけては、友人との関わりが重要で、よき心の友を得られれば、幸運であると言います。友人という存在が大きな意味をもつ時にいじめにあうことは非常に危機的な状況をうみだしますし、

その前段階である学童期（小学校時代）においてもいじめも受け続け、それを大人が気づいてくれない、助けてくれないとなると、この時期に育つ適格意識（社会の一員としてやっていけるという意識）が養われない状況となってしまいます。

いずれにしても、小・中・高校時代は絶対にいじめを見逃してはいけないし、本人や周囲の人がいじめの存在について発信しやすい環境を整えておくべきだと思います。

発達障害を抱えた子どもは、いじめに合いやすいと言われています。それは、通常と違った言動が周囲から理解されにくいし、周囲と同じようにできない＝能力がないと勘違いされてしまうからです。

私は「みにくいアヒルの子」というお話が大好きです。黄色いひよこにいじめられ続けた灰色の少し大きい体のひよこが最後は白鳥になるというサクセスストーリーに感銘を受けるからです。みにくいという表現は適切ではありませんが、みにくいアヒルの子が発達障害の子とダブって思えてなりません。（実際は発達障害を持った子はとてもかわいいのですが…）私は彼ら彼女らの可能性を信じて接していきたいし、他者の能力や価値を勝手に値踏みし、いじめるなど絶対にあってはならないと思います。

ただ、いじめている人やいじめを傍観している人も、実はＳＯＳを出している子どもたちであることも忘れてはなりません。

子どもの心の声、叫びに気付こうではありませんか。